

## 地元の港に魚が上がらない

この間、大津港界限で聞きかじった話。ちなみに写真は、1998年に撮影した大津港でのイワシの浜上げです。

こうした風景が、ほとんど見られなくなってしま

いました。イワシの漁はあっても、地元には陸揚げされず、銚子港のほうにまわってしまうそうです。

背景には、たとえば「デカン」(出買?)といわれる商習慣のちがいなどがあったそうですが、その辺はもう少し勉強します。

さらに、これと相まって、ここ数年、冷凍倉庫を備えた大きな加工業者が軒並み廃業してしまいました。



陸のほうにも、大きな船を受け入れる条件がなくなっているのです。

浜上げがなければ、つながる陸での仕事まわらず、そこでの働き手の収入がない。当然、街の商店



強風で倒壊・解体したハウスのパイプをまっすぐして、鶏舎の屋根の骨材として再利用してみました。曲がればゴミ、伸ばせば資源(笑)；

にも影響が及ぶ、そうした悪循環が街の活気を失わせています。

私たち農業も大変だけれども、漁業とそれに関連する地場産業の実態も深刻です。

## あきらめない「脱ダム」

あの「脱ダム宣言」が葬り去られ動きが報じられています。残念な

思いを込めて、下記に収録し、記憶にとどめたい。

### 脱ダム宣言

数百億円を投じて建設されるコンクリートのダムは、看過し得ぬ負荷を地球環境へと与えてしまう。更には何れ造り替えねばならず、その間に夥しい分量の堆砂を、此又数十億円を用いて処理する事態も生じる。

利水・治水等複数の効用を齎すとされる多目的ダム建設事業は、その主体が地元自治体であろうとも、半額を国が負担する。残り50%は県費。95%に関しては起債即ち借金が認められ、その償還時にも交付税措置で66%は国が面倒を見てくれる。詰まり、ダム建設費用全体の約80%が国庫負担。然れど、国からの手厚い金銭的補助が保証されているから、との安易な理由でダム建設を選択すべきではない。

縦しんば、河川改修費用がダム建設より多額になるうとも、100年、200年先の我々の子孫に残す資産としての河川・湖沼の価値を重視したい。長期的な視点に立てば、日本の背骨に位置し、数多の水源を擁する長野県に於いては出来得る限り、コンクリートのダムを造るべきではない。

就任以来、幾つかのダム計画の詳細を詳らかに知る中で、斯くなる考えを抱くに至った。これは田中県政の基本理念である。「長野モデル」として確立し、全国に発信したい。

以上を前提に、下諏訪ダムに関しては、未だ着工段階になく、治水、利水共に、ダムに抛らなくても対応は可能であると考え。故に現行の下諏訪ダム計画を中止し、治水は堤防の嵩上げや川底の浚渫を組み合わせる。利水の点は、県が岡谷市と協力し、河川や地下水に新たな水源が求められるかどうか、更には需給計画や水利権の見直しを含めてあらゆる可能性を調査したい。

県として用地買収を行うとしていた地権者に対しては、最大限の配慮をする必要があり、県独自に予定通り買収し、保全する方向で進めたい。今後は県議会を始めとして、地元自治体、住民に可及的速やかに直接、今回の方針を伝える。治水の在り方に関する、全国的規模での広汎なる論議を望む。

平成13年2月20日

長野県知事 田中康夫